

年間第十一主日

2013.6.16

ルカ 7・36-50

今日の福音は、イエスとイエスによってその罪をゆるされた一人の女性の出会いの物語です。今私たちが聞いた福音は、福音書の中に語られている、イエスのもとに来て、イエスと出会うことの出来た数多くの人たちのエピソードの中でも、最も信じがたい、そして最も感動的な出会いを語るエピソードのように思います。このエピソードのどこが信じがたいかと言えば、イエスが彼女の罪をゆるしてくださったということではありません。私たちが信じ、知っているイエスは私たちの罪をゆるしてくださるお方です。このエピソードが信じがたいというのは、食事の席に着いているイエスのもとに近づいて、彼女がとった行動ももちろんですが、人々から罪深い女とレッテルを貼られるような生活をしている彼女が、人々の見ている前で、自分の方からイエスに近づき、あのような行動を取ったということです。彼女の中にどのようなことが起こったから、彼女はあのような行動を起こすことが出来たのでしょうか。ここに自分というものをしっかり見つめ、しかもその自分の現状に絶望することなく、信頼そのものになりきってイエスの御前に身を投げ出した一人の人の回心の物語が語られているのです。私たちが信じているイエスというお方は、そのような一人ひとりの人の全てを知っていてくださり、その全てを受けとめてくださるお方です。今日の福音の女性は、その苦悩に満ちた人生におけるイエスとの出会いにおいて、そのようなイエスの姿を私たちに示してくれることによって、私たちを圧倒します。

福音書には、イエスを求めて、自分からイエスに近づいた多くの人たちが登場します。その多くの人たちはイエスに聞き届けてもらいたい、他の人にも一目で分かる明確な願いがあって、イエスに近づいた人々です。イエスによって病気を癒してもらったり、不自由な体を治してもらった人々は、はっきりとした願いがあって、イエスに助けを求めたのです。その人々がイエスに求めた願いは私たちにも分かります。私たちもそのような立場になれば、イエスのもとに助けを求める気持ちになると思います。けれども、今日の福音に登場する女性がイエスに求めたことは、それらの多くの人々がイエスに求めたこととは、質的に全く次元の異なることです。もし、私たちが彼女と同じようなところで身を置いているとするなら、彼女と同じような行動を起こす勇気が私たちにあるのでしょうか。そもそも、彼女にあのような行動を取らせるに至った発想が私たちの中にあるのでしょうか。彼女はイエスに自分の罪のゆるしを求めたのです。イエスなら、罪深いこの自分を追い払ったりはせず、真直ぐ受け止めてくださ

ると、彼女はまだ会ったこともないイエスへの期待に胸を高鳴らせたのです。そのお方の前に出ることが出来たら、自分のこれまでの全てを白日の下に曝すことが出来ると思いつめたのです。彼女はどこからそのようなイエスへの信頼の確信を得たのでしょうか。

イエスについての人々の評判は彼女の耳にも届いていたことでしょう。イエスによって行われた数々の驚くべき奇跡のみわざは彼女の周囲にも伝えられていたはずです。そしてそのイエスが語られたということは、感動をもって彼女の心にも響いたことでしょう。たとえば迷える一匹の羊を見つけ出した牧者の喜びを語る福音、放蕩息子の帰りを狂喜して向かえる父親の姿を通して、神の愛の大きさを語る福音は彼女の胸を熱くしたことでしょう。そして何よりも、彼女をあのよう行動に駆り立てた直接の動機は、そのイエスが徴税人の人たちや自分と同じような境遇にある者たちを、何のためらいもなく喜んで受け入れておられるイエスというお方の評判だったに違いありません。

今日の福音が私たちの心を揺り動かすのは、そこから彼女が取った行動です。私たちも彼女と同じように、イエスがなされた数々の驚くべきみわざを伝え聞いています。イエスが語られた全てを彼女よりもよく知っています。イエスというお方がどれほどに、私たちの全てを知ってくださる愛にあふれるお方であるかを、私たちは聴いているはずです。そして今、そのイエスは私たちの中の、どこにおられるかということも知っているはずですが、けれども、多くの場合、私たちの心は彼女の心を熱くした想いを忘れてしまっています。彼女を突き動かした、私たちにとってのイエスというお方への衝動を忘れてしまっています。もし私たちの今の信仰の状態がそのようになってしまっているとするなら、そういう私たちの目の前で今日の福音の女性が取った行動は、まさしく私たちには信じがたいことといわざるを得ません。これほどのイエスへの信頼と、そのイエスの前に自分取るべき態度をストレートに表現できる人がいるということは、今日の福音のもう一人の登場人物であるシモンにとってそうであったように、私たちにとっても、信じがたいと言わざるを得ません。

今日の福音には、一見、イエスと出会った多くの人たちが経験したような奇跡の出来事は語られていません。けれども、他のどの奇跡よりも大きな奇跡を今日の福音の女性は経験したのです。伝え聞いたイエスをいうお方の評判だけを拠りどころとして、彼女はその生活の中からイエス足元に身を投げ出したのです。そしてイエスは彼女が信じたとおりに、決して彼女を足蹴にするようなことはなさらず、彼女がそうしようと心に決めていたことの全てを、彼女のなすがままに受け入れてくださったのです。彼女が思い切ってイエスのおられる家の戸を押し開いた時、彼女のそれまでの全ては、もうイエスによってゆるされていたのです。だからイエスは彼女に「あなたの信仰があなたを救った」と

言うてくださるのです。

主イエスにとっては、彼女がその足に塗ってくれた高価の香油よりも、彼女がその足を濡らしてくれた彼女の涙のほうが、幾千倍も貴重なものであったことでしょう。うらやましいと思います。私たちはイエスの足元にひれ伏して流す涙を久しい以前から枯渇させてしまっていたことを思い知らされるからです。その分だけ今日の福音の女性がその手のひらに、その頬に感じ取ることが出来たに違いない、イエスのぬくもりを忘れてしまっているからです。

町の人々から罪の女と呼ばれていた女性をあのように受け止めてくださったイエスにとっては、私たちが罪だと思っていることは、それゆえに、自分のようなものは神に近づくことは出来ないと思っていることは何ら障害とはならないのです。私たちはファリサイ派の人々がそう信じていたように、神のおきてに背く、私たちの一つ一つの具体的な悪い行為が罪だと思っているかもしれませんが、けれども、イエスにとっては、罪とはそのようなものではありません。牧者のもとから迷い出た羊のように、父親のもとを立去った放蕩息子のように、父なる神の愛の懐を忘れることが、そこから遠く迷い出してしまうことが罪なのです。イエスは、その惨めな状態から私たち全てのものを連れ戻すために来てくださった、私たちの真の良い牧者なのです。愛する者のためにいつでもそのいのちを投げ出す無限の愛に満ちた良い牧者なのです。

今日も私たちは、私たちの日々のありようにも関わらず、その食卓の席に招き入れてくださるイエスの招きに応じてこのミサにあずかり、十字架の上で私たちのために与え尽くしてくださったイエスのいのちによって養っていただきます。私たちにはそのようには思えないかもしれませんが、私たち一人ひとり皆、今日の福音の女性と同じように、彼女が経験したイエスがもたらして下さる、それこそがイエスの真の奇跡のみわざを経験しているのです。このミサにおいて私たちは、今日の福音の女性がイエスから受けた、罪のゆるしと信仰による救いを体験させていただいているのです。今日の福音が私たちの心を打ち、私たちの頑なな心を開いて、今日の福音の女性が経験することが出来た、心の底からの救いの喜びに満たされる恵みを願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高